

魔女にお菓子をねだられたら、ちゃんと差し出しなさい。
お菓子をもらえなかつた魔女は、子どもをさらってしまうの
だから――。

森の中の一軒家。人の手が加わることなく年月を経、雨風に晒されて朽ちていくばかりと思わせる、小さな家。その、半ばガラスの割れた出窓に、木漏れ日が差し込んだ。

晩秋の柔らかい日差しが、出窓の上に置かれた白い猫の置物に当たる。

ふ、と、猫の置物の輪郭が揺らいだ。

一瞬の錯覚かと思紛う揺らぎが収まった後、一拍ほどの間を置いて、猫がぐつと動いた。

置物は本物の白猫に変わり、ガラス玉だった紫紺の双眸が眠たげに細められる。丸めていた身体を思うままに伸ばした白猫は、大きく欠伸を零したあと埃の積もった床へと飛び降りた。

白い床に黒い足跡を残しながら、猫は屋敷の奥へと向かっていく。

一つの扉の前に立った猫が前足を伸ばす。扉を軽く引っかけと、重たげに見えた扉は簡単に隙間を作った。

柔らかな身のこなしで猫が滑り込んだのは、この屋敷の主寝室だった。

部屋の中央から少し奥、大きな窓の脇に置かれた天蓋付のベッドに、白猫は軽やかに飛び乗った。

日差しを遮る紗幕を潜り中を覗き込む。そこには、一人の女性が眠っていた。

白いシーツに長い黒髪が散っている。臉を閉じた顔は白磁

よりもなお白く、血の氣に乏しい表情は精巧な人形を思わせ
た。

白猫はその顔を眺め、一声鳴く。けれど、女性は微動だに
しない。胸の上で両手を組んだまま、こんこんと眠り続けて
いる。

猫は、その顔を覗き込んだ。一向に反応が返らないことを
確かめて、紫紺の双眸がぐっと細められた。

そのまま、白猫はためらいなく、無造作とも言える動きで
女性の胸の上に座り込んだ。何度か身じろぎして、ちょうど
女性の顔を覗き込める位置に身体を落ち着ける。

紫紺の瞳が何度か瞬く。すらりとした体躯と対照的なふわ
りとした長い尻尾が、何かを待つように緩やかに右左にと揺
れた。

程なくして、女性の臉がピクリと震えた。次に柳眉が鬨め
られ、額にわずかに苦悶の色が浮かぶ。

白猫は、それを静かに見つめている。

女性の薄い唇があえかに開く。猫が乗る胸が、緩やかに上
下し始める。

それでも猫は動かない。ただ、紫紺の瞳で女性を眺めてい
る。

やがて、女性の臉がゆっくりと持ち上がった。赤みがかつ
た紫色の瞳が、白猫を映す。

そして――。

女性の唇から、明らかな怒声が発せられた。

「ちよつとローザ、重いわよ！」

けれど、白猫は涼しい顔で蹲っている。

女性は苦しうに顔を歪めて白猫を睨んだ。ちよつど胸の
上に乗られているせいで上手く息が継げないのだ。

苦悶に呻く女性をさらに眺めてから、白猫はようやく立ち
上がった。けれどまだ足は女性の胸を踏みしめている。

「どいてつてば――！」

その声に、ようやく猫は身体の上から飛び降りた。女性が
弾かれたように身を起こす。

「あんたねえ！」

けれどその文句は、こみ上げてきた閃に途切れてしまう。
ベッドに突つ伏すようにして空咳を繰り返した女性は、生理
的ににじんだ双眸で白猫を睨む。白猫は、そ知らぬ顔で、ふ

わふわの尻尾を緩やかに振って見せた。

「もう少しさ、優しく起こしてくれてもいいでしょうが」

「何言ってるの、自分で起きたためしがないくせに。私はね、
あなたが寝坊したせいで使い魔失格だとか、そういう陰口を
叩かれるのが嫌なだけよ。それとも何？ 今度は顔に乗って

あげましょうか？」

白猫は紫紺の瞳を細め、答えた。

「勘弁してよ、ローザ……」

呻くように呟いた女性は、肩を落としてからベッドから降

りた。

真つ白い素足が、埃まみれの床につく。それを覆い隠すように、漆黒のドレスの裾が広がった。

「怠け者だつて言われなくなつたら、さつさと支度しなさいよ、ミレディ。ハロウインの祭りは今夜なのよ」

「分かつてるわよ」

黒衣と黒髪に覆われた漆黒の魔女は、紅藤の双眸を伏せた。朽ちかけた屋敷の中を、さわやかな風が吹き渡っていく。風が通り過ぎた後、屋敷は息を吹き返した。魔女の力が、屋敷の隅々にまでいきわたる。あちらこちらの窓がひとりでに開き、冷え切っていた暖炉には火が燃え盛る。文字通り止まっていた時間が動き出したのだ。

ミレディが黒髪を掻きあげた。紅藤の瞳がどうだといわんばかりに白猫を見下ろす。

「ほら、さつさと支度！」

けれど白猫は、尻尾を膨らませて冷ややかに言い返すだけだった。

「はいはい、分かりましたつてば」

黒衣を翻して魔女が歩く。

すつかり目を覚ました屋敷は、主を暖かく迎えるようだ。その時、バサバサドサドサと場違いなほど賑やかな音が響いた。

ミレディの、軽やかな足取りが一瞬乱れる。

「ローザ」

半歩後ろを歩く使い魔に、魔女は一言呼びかけた。

「何よ、私に処理しろつての？」

けれど、返ってきたのは反抗的な言葉だった。

「あれ全部、あなた宛の手紙でしょ。会合すつぽかしたことの苦情とか、支払いの催促とか」

「あんたは私の使い魔でしようが」

「いいけど。全部オーケーの返事して、支払い手続きしとくわね」

どこまでも強気な白猫に、ミレディは舌打ちした。

左手を一閃させると、玄関に山をなしていた手紙がすべて浮かび上がり、群れた鳥の羽音のような賑やかな音を立てて廊下を飛んだ。

二人を追い越して机に山を作った紙束に、ミレディは思い切り顔を顰めた。

「役立たず」

「毎回毎回十年も時間とめて仕事放棄する人に言われたくないわよ。普通に起きててちゃんと仕事してれば、溜まらない量じゃない。そもそも今日の仕事場だつて確認してないくせに。これまでサボつたらあなた、協会から除名されるわよ」

ミレディは足元の白猫を睨んだ。ローザも負けじと主人を見上げる。

色合いの違う二つの視線が絡んで、先に折れたのはミレディ

イだった。

左手の指で、山と詰まれた手紙を差し招く。ぶるりと震えた小山が雪崩を起こし、その中から古めかしい羊皮紙がひとつ飛び立った。

目の前に浮かぶそれをひったくるようにわし掴んだ魔女は、赤い封緘に嘆息する。

「げ、今の會長つてアツテロなの。出世したもんね。でもあいつ、口うるさくて面倒なのよ」

「あなたに口うるさくしなきゃいけない彼の気苦労のほうがかわいそうだと思うわよ」

顔を蹙めたまま、ミレデイは羊皮紙に目を通す。さらに凶悪な表情になった魔女は、羊皮紙を床に放つてため息をついた。

「まったく、面倒なんだから。仕方ない、支度してくるわ」
小部屋に向かう魔女を見送った白猫は、丸まって転がる羊皮紙を前足で軽くつついた。とたんに手紙は生き返ったように跳ね上がり、白猫に中身を広げる。

「ふうん——」

文面に視線を走らせたローザが唸る。

「あの街、結構人が多いところよね。ミレデイがやる気をなぐさなきゃいけないけど」

仕方ない、と嘆息して、使い魔は主を追う。

取り残された羊皮紙は、再度鳥のように飛ばたいて机の上

の小山に埋もれに行つた。

カーテンを閉め切つた部屋に、ミレデイは居た。

外部から光の差し込まない部屋は、仄かに明るい。

光源は、天井から一まとめに吊り下げられた小さな壇たちだ。

小さなラベルが貼られた小壇には、それぞれ色合いの異なる液体が入っている。魔女の指先にゆすられて小さく波打つ液体自体が、淡く発光しているのだ。

「今年は、どれがいいと思う？」

視線を向けないまま、滑り込んできたローザに問う。

「アツテロの奴、大きな街を指定してきたんだよね。この場合、目立つた者勝ちだと思っただけど」

「逆じゃないの？ 人が多いってことはつまり、昔からの伝統が廃れやすいつてことよ。ハロウインの祭り自体がイベントになつちやつたりしてね。幸福をもたらす魔法使いの訪れなんて、おとぎ話としても知らない子どももいるんじゃないの？ 今年は分かりやすく魔女らしい格好にしておいたら？」

「そうねえ……」

ミレディは細い指先でガラス壘をくるくると回した。貼られたラベルの小さな文字をいくつか辿り、やがて一つで止まる。

「決めた。今日はこれにするわ」

ミレディが引き抜いたのは、淡い緑色の小壘だった。コルク栓を外して、中身を呷る。

変化は、すぐに始まった。

魔女の周りで、ぱちぱちと青色の火花が散る。背を覆う長い黒髪がふわりと浮き上がり、くるくると巻き上がっていく。黒いドレスも風に青割られたようにはためいた。

火花の触れた髪は白く発光し、そのままの色が定着する。身体の周囲を飛び回る光は、やがてドレスを包み込んでいく。賑やかな音と薄い煙とが収まったあとに立っていたのは、半分銀色に変化した髪を大胆に結い上げた派手な女性だった。

魔女は、指先で黒いドレスをなでる。とたん、質素な印象だった黒衣がジャラリと音を立てた。

左の肩口から胸の前までを覆う銀の刺繍は複雑な曲線を描きながら薔薇を浮かび上げ、手首までを覆う袖には、いくつもの細い銀鎖が絡みつき、動くたびにシヤラシヤラと音を奏でる。

「どお？」

そこだけは変わらずに薄紅色の唇が、楽しげに問う。あん

ぐりと口をあけて変化を見ていたローザは、これ見よがしなため息をついた。

「どこにそんなド派手な格好した魔女がいるってのよ。あなた、私の意見なんてまったく聞かずもりもないのね」

ふわふわの尻尾が膨らんでみえるのは、間違いなく怒りのせいだろう。

「分かりやすく魔女らしい格好に、って言ったじゃない。最初の一人に認識してもらえなかったら大問題だって自覚ないの？ その姿でドア叩いて、ハロウインの魔女だって理解してくれる子どもがいると思うの？ 怖がらせるつもりなら大成功だけど、そうじゃないでしょうが」

「あーウルサイ。いいのよこれで。今の私の気分にはびつたりなんだから」

「ああもう、いいわ好きにしないさい」
「あなたも外見変えてあげようか？ いつも白じゃ面白くないでしょ。そうね、赤とか青とか」

「結構よ。私は白猫。それが誇りなの」

嘆息する白猫に、ミレディは肩をすくめて見せた。

「ああそう、別にいいけど。さ、そろそろ時間よ。幸福な子どもを探しに行きましょう」

魔女は小部屋の扉を開いた。

廊下の突き当たりの窓からは、茜色の光が差し込んでいた。